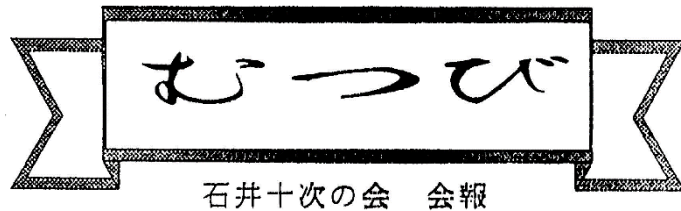


2023年
(令和5年)
5月11日



308号

「友愛社で過ごした春夏秋冬は夢が叶う為の礎でした」 —前編—

宮崎市 溝尻 輝政

月日の経つのは早いもので、昭和42年に中学卒業と同時に就職の為、友愛社を離れてから早56年経ってしまいました。今、振り返ってみれば短い友愛館の生活の中で培った様々な経験を得た事により社会に出てからも役だったものと信じ、そのごく一部分を綴ります。

春には牛と一緒に鋤で田んぼを耕し馬鍬（マンガ）で馴らした後、中学生以上の者は田んぼに一列に並んで田植え綱の印の所に手作業で苗を植え、1列目が終わると次の列へと後退移動しながらの植え付け作業でした。田植えの最中に児嶋琥一郎先生が「植え方が早いだけではダメ、きちんと根が土の中に入っていないとだめだ。」とおっしゃっていた言葉は未だに脳裏に焼き付いております。田んぼでの作業は慣れていない為か、みんな泥んこになりながら腰が痛くなるのを我慢して一生懸命に苗植えをしたものでした。田植え後、しばらくすると苗も大きくなり伸びるにつれて雑草も同じ様に伸びるので除草作業が忙しくなります。暑い日差しの中、腰を曲げて雑草を手で採るのは非常に辛い作業でした。でも稲刈りを終え、長い孟宗竹に物干し竿みたいに稲束をかけて天日干しをし、乾燥後、田んぼ内で脱穀しトウミでワラクズを取り除く作業は、気分的にも全然苦にもなりませんでした。みんなと出来上がった粳米にさわると、とっても嬉しかった思い出があります。収穫時の喜びは昔も今の園生も同じ気持ちになるのではないのでしょうか。私が住んでいた友愛館の場合は脱穀した粳米を牛舎の2階の粳米専用の保管庫に入れておき精米に出す度に「どんごろす」に入れて運んだ記憶があります。先日、友愛館を訪れた時には敷地内に牛舎は当時のまま残っていましたが粳米の保管庫は残念ながらありませんでした。最近では端午の節句になると友愛社の田んぼに鯉のぼりが沢山泳いでいると知り、孫と見に行ったことも思い出の一つとして増えました。

夏前のカライモの植え付け時期になるとイモ畑を牛に鋤を牽かせながら耕すのですが、慣れない頃は牛よりも自分の方が先に疲れ果ててしまう次第でした。上級生の指導を受けながら悪戦苦闘しつつ牛の手綱と鋤の操作に慣れるに伴って鼻高々になりながら作業を続けたものです。耕運機など無い時代ですから手綱と鋤の使い方を会得するのは生活する上でとても重要なものだったからです。今風に云えば、牛のあやつり方と要領良い鋤の操作を会得出来た事で、作業中に指導を受けた上級生の前を通るときには、どや顔状態になりました。

梅雨明けあたりから真夏にかけてカライモ畑の雑草取りをするのに畦上に伸びている芋のツルを左右に分けつつしゃがみ込んで草取りをしておりました。蔓のアクで手のひらに真

っ黒い斑点が付き洗い落とすのに難儀したものです。最近の芋畑は畦に黒いビニールシートを被せ雑草対策が施されているから随分と楽になったようです。芋の収穫前には、牛の餌にするためツルを刈り取って丸く束ね、2 m位に切った竹で束ねたカライモの蔓を天秤状態にして牛舎に運ぶのに竹が肩に食い込んで痛くなり肩を左右交互に変えながら陽が暮れるまで運んだものでした。当時の友愛館の廻りには広葉樹が多く、掃除した後の落ち葉は燃やしていました。落ち葉のたき火でホッカホカの焼き芋を食べていた頃の姿が懐かしいです。たき火を囲んでみんな満面の笑みで美味しく食したものです。何しろ元気で育ち盛りの時でしたからいつもお腹を空かしている状態でした。最近の焼き芋ブームの様です。しかし、庭でたき火をしながら焼き芋を食していたなんて想像もできないのではないのでしょうか。

秋口のある時期からは、風呂を沸かす為の薪と毎日の食事を作るためのかまど用の薪を蓄えるための日課が始まります。下校後は毎日、先生やみんなが伐採した3 mから4 m程の重たい生木を近場の山から友愛館の薪置き場まで、肩に担いで「ザーザー」音を立てながらひっこずって運ぶのが日課でした。1年間分の薪を準備しなければならないので相当な量です。この作業をしないと食事どころか、お風呂にも有り付けない事になってしまいます。一生懸命運んだ生木を今度は一定の長さに切り薪棚に積み重ね、どんどんと高くなり、ある高さで終了した時は辛い作業から開放され「ホッ」としてしていました。何しろプロパンガス、風呂用のボイラー等の設備が無い時代ですし、薪を運ぶ運搬車なんて考えられない時代でしたから今思うと時代に見合った作業なんだと今更ながら感心しております。

また、寒い冬を乗り切るため、薪ストーブの燃料確保も日課の一つです。薪ストーブはみんなが一同に集まり食事、勉強等をしていた広間にだけ備え付けられていました。薪ストーブの燃料として、近場の里山で枯れた大木を倒して人力で運びストーブに入る長さにノコギリで切ってはオノで割り保管していました。大木をノコギリとオノのみで倒す場合には危険が伴うので上級生の指導を受け、それを下級生に引き継ぐ事で自然と安全な作業を実施してきた記憶があります。また薪割りでも、木の太さ、木の種類や状態で微妙なオノの振り方等に力加減を要したものでした。きれいに薪が割れた時は、作業仲間で拍手したりして交互に薪割りの熟練度を競い合ったものです。寒い中、遊び心も兼ね備えたような薪割りは身体の暖まる作業でもありました。

以上の様な作業を通して、ノコギリ、ナタ、オノ、鎌の扱い方、太くて高い木の伐採等、山仕事の安全な作業の仕方を上級生に教わりながら身につけた次第です。

当時の友愛館は森に囲まれていたので非常に寒かったです。12月頃には畑や道路（未舗装で砂利道）に霜柱が立ちザクザクと音をたてながら歩く中で大根の収穫が待っていました。1本1本霜が降りている葉っぱを掴んで引き抜く作業は、数も多く体力も要るし服も濡れてくるので寒さとの戦いでした。晩ご飯のおかずは、友愛館の女子達で作ったおでん類の美味しかった事が忘れられません。先日、友愛館を訪れた時に、大根畑だった場所を探しても竹林に覆われており当時の畑の面影は全く見当たりませんでした。何となく淋しく感じた次第です。

（後編に続く）

4. 諸秀、医師の道を断念し、高鍋に帰る

石井十次は明治20年(1887)の日誌に「5月2日、従弟諸秀氏、帰郷に決す」と書いた。諸秀は医師になる道をあきらめ、4年間在学した岡山医学校を退学して高鍋に帰った。資金がなくて困ったのは諸秀だけではなかった。十次は高鍋からの遊学生^{あんま}の生活費をかせぐため、按摩^{あんま}のアルバイトまでしたが、稼ぎは少なく借金は増え続けた。見かねた岩谷小梅^{いわやこうめ}は岡山医学校校長・菅之芳^{すがゆきよし}を訪ね、十次の窮状を訴えた。菅校長は「自分の学校にそんな奇特な学生がいるのか」と驚き、十次を自邸の書生として住み込ませた。

5. 諸秀は結婚し、宗教視察のため米国に渡る

高鍋に帰った諸秀は、明治23年(1890)8月、宮崎教会伝道師・蜂谷芳太郎^{はちやよし太郎}司会により高鍋で初めての基督教式結婚式を挙げた。新婦は津野國太郎^{つのくにたろう}の娘・ツチである。明治25年(1892)8月には、諸秀夫妻は生まれて間もない長男・寿^{ひさし}を伴って京都に行き、同志社神学校の聴講生となった。同志社を修了すると、岸和田教会伝道師に招聘された。明治29年(1896)、諸秀夫妻は石井十次の招きにより岡山孤児院で働くことになった。「岡山孤児院親戚・石井十次氏の招きにより同院に赴き、孤児救済に力を尽し、断食^{だんじききょう}祈禱を以て孤児と共に飢餓辛酸^{きがしんさん}を嘗むること殆ど3ヶ年」と、高鍋郷友会報告第64号(昭和7年11月)は当時の諸秀夫妻の十次支援の生活を報じている。明治35年(1902)1月、諸秀は米国宗教視察の目的で渡米した。



米国の洋服店で日本人数人と正装して働く諸秀。日本人はプラッドをもって働いた

サンフランシスコに住み、洋服店に就職して生活費をかせいだ。その間に米国の農村事情を視察。日本と米国のあまりの格差に驚いた。「(米国の)土地は一攫^{いつかく}の肥料を施さずとも五穀^{ごこく}豊^{ほう}塾^{じゅく}し、百菜^{ひゃくさい}野に充ち牛羊^{ぎゅうよう}群をなし、(中略)男女は同権にして男子の上に女子なく女子の上に又男子なし(中略)日本の婦女子ほど権利なくして不幸なるものはなし(後略)」との報告を高鍋郷友会に書き送った。諸秀には米国の社会が理想的に見えた。妻・ツチは明治39年4月、夫の招きで長男とともに渡米した。家族は一緒に住めるようになった。ツチは就職して仕事をしながら子供を養育した。長男・寿が成長し養育が不要となった大正8年

(1919)9月、諸秀夫妻は寿を米国に残して帰国した。19年ぶりの帰国だった。ふたりは郷里高鍋村菖蒲池の旧制高鍋高等女学校(現・高鍋東中学校)前に文具店「文化堂」を開いた。昭和7年(1932)6月、妻・ツチは急病のため昇天した。

6. 高鍋キリスト教会が設立され、諸秀は教会運営の中心を担う

高鍋におけるキリスト教伝道は、明治12年(1879)に新島襄が同志社の卒業生・小崎弘道を伴って宮崎に来た時に始まる。小崎は荻原百々平の斡旋で高鍋を訪れ伝道を開始。19年5月、荻原恕平(百々平兄)、岩村真鉄(十次義兄)が洗礼を受ける。20年には石井ノブ(十次母)も受洗。21年に岩村真鉄、石井ノブ等47人を発起人とし高鍋に日向基督教会を設立する。その日に石井シナ(十次妻)も入会。高鍋教会は宮崎県におけるキリスト教伝道の中心となった。明治21年は石井十次が孤児救済を決意した年である。両者が同時期に発足したのは、十次とその関係者が期せずして通い合う心境にあったためではないだろうか。

萱嶋諸秀は大正11年(1922)10月から高鍋教会執事^{しつじ}(教会運営の責任者)を務めた。すでに十次は亡くなっていたが、十次と彼を支えた人々の思いを引き継いで高鍋教会を運営し布教に努めたのである。加えて「高鍋発展のための高鍋・上江・木城の三村合併^{さんむりあわせ}、杉安から高鍋に通ずる鉄道敷設」などを提案。諸秀の中では高鍋教会への思いと、郷里・高鍋への思いが溶け合い、渾然一体となっていた。

昭和27年(1952)7月23日にその生涯を終える。享年86歳。

石井十次顕彰会理事長・萱嶋稔氏は諸秀氏の甥・秀樹氏の長男である。同氏から諸秀氏に関する資料や写真をご提供いただきこの原稿を書くことができた。ここに感謝の意を表する。(編集委員 石川正樹)
参考資料：信天記、高鍋キリスト教史叢、高鍋基督教傳導史、石井十次日誌、高鍋教会百年記念誌、高鍋郷友会報告

★二つの感動

新緑が目に見え鮮やかな清々しい季節となりました。友愛社の田んぼにも、緑色の稲が20cm程に元気に成長しています。日本中がWBCの決勝戦TV観戦に沸いていた3月22日、友愛園の子どもたちが雨の中ずぶ濡れになりながら植えた稲です。子どもたちもWBCのTV観戦予定でしたが、本来の田植え予定日が大雨の天気予報で、この日急遽田植えになったとのことでした。



「試合はどうなっていますか？」1人の子どもの私に尋ねました。「日本がリードしているよ」私は応えました。

この日は、WBCの日本代表選手の決勝戦の素晴らしい戦い方の姿、雨の中田植えを頑張っている友愛園の子供たちの姿、二つの感動を得た日でした。

★鯉のぼり掲揚

4月8日(土)友愛園の子どもたち・職員・児嶋理事長・橋田会長・十次の会ボランティアの方々と毎年恒例の鯉のぼりの掲揚を行いました。

見学の保育園の園児たちから「頑張れ一鯉のぼりさん」のエールの中、150匹の鯉のぼりが青空に元気に泳ぎだしました。

来年度より鯉のぼり掲揚は、毎年第2土曜日に実施します。是非見学に足をお運びください。

編集委員 松下さおり

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介 (敬称略)

【都城市】創宮(株) 【三股町】福山陽子 【高原町】山崎隆 【高鍋町】日高信吾 【都農町】黒木隆廣

★ご寄付をいただきました (敬称略)

【宮崎市】西野宏・悦子 古賀義明・トシ子 飯尾彪 横山久美子 中武千佐子 福原美江 播磨美保子 藤本好子 皆内康広 清水昭男 日高和子 片野郁子 岡元ます子 酒匂千昭 黒水斐子 【都城市】新森初男 朝倉脩二・信子 本郷貞雄 【延岡市】川並順子 山崎きよ子 【日南市】佐藤信明 【日向市】黒木美里 【西都市】黒木良直 今井美富 黒木三鶴 河野由美子 黒木郁雄 松岡章子 福田由美 【高原町】森山雅之 【高鍋町】長尾昭 浦叶 坂田昭子 あおい会館 徳地明・順子 河原清子 松生晃 蟻塚クリニック 【木城町】森さち子 石井雄二 【川南町】吉村幸代 【茨城県】森邦彦 【埼玉県】新福教一 【千葉県】金平万吉 【東京都】永野泰三 三木健一・俊子 末藤直子 富田速人 柳田せい子 【神奈川県】篠原勝 松岡宏 【大阪府】山縣文治 【愛知県】栗崎教雄 和田鈴子 【広島県】田中浩洋 【岡山県】叶原土筆 馬場敢 【福岡県】松岡智・則子 師村妙石 【長崎県】増田康行

*ここまでの掲載者は編集等の都合により4月25日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

㊤ 884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

●巻頭は、宮崎市・溝尻輝政様に玉稿をいただきました。溝尻様とは、昨年11月宮崎支部のこひつじ保育園でのコンサートに参加して頂いたことが出会いのきっかけとなり、原稿執筆をしていただきました。有難うございました。なお、玉稿は前編・後編の2回に分けて掲載します。来月号の後編も楽しみにお待ちください。

編集委員 松下 さおり